

年上幼なじみの若奥様になりました

お正月というのは、おめでたい日ではなかったのか。

その日、家族や幼なじみらとのんびりすごしていた落合蒼恋のもとに、最悪の報せが訪れる。

郵便局員から自分あての書留を受け取った蒼恋は、玄関で呆然とした。

「……内定、取り消し？」

蒼恋の手を離れた封筒が床に落ちる。それにかまわず、彼女は握りしめていた用紙を注意深くもう一度読んだ。

そこには蒼恋がこの春、大学を卒業して就職する予定だった会社からの説明書きがある。親会社  
が実質倒産し、そのあおりを受けた内定先は今後の運営の見通しが立たなくなったとのことだった。

「う、嘘でしょ。今さら」

何度読んでも内容は同じだ。間違いではない。

十五社も受けて、ようやくもらえた内定だったのに。ショックで目の前が真っ暗になる。板張りの廊下の冷たさが、タイツを穿いた足の裏にしみこんでいった。

「蒼恋、どうした？」

そこに、リビングから出てきた野田晃弘のだあきひろの声が届いた。

こんなときだというのに、蒼恋の胸がきゅんと鳴る。

晃弘は蒼恋のとなりの家に住む、十歳年上の幼なじみだ。四年前、蒼恋が大学入学のときに名古屋へ転勤となったが、盆と正月には必ず東京へ帰っていた。彼には母がいなかったため、正月は彼の父親とともに蒼恋の家ですすのが恒例となっている。

落合家と野田家は家族ぐるみで仲がよいのだ。

「あ、晃あきちゃ、ん」

ただごとではない蒼恋の様子を見た晃弘は、その端正な顔を曇らせる。

「何が届いたんだ？」

背の高い晃弘は、かがんで用紙を覗のぞきこんだ。

「見ちゃダメ！」

蒼恋は咄とつ嗟さに用紙を握りつぶし、背を向けた。その拍子に、蒼恋の肩下まである髪が揺れる。

こんな情けないもの、この人にだけは絶対に見られたくない。知られたくない。

幼いころから現在まで片思いをしている、初恋の人にだけは――

「どうしたの、蒼恋」

今度は母だ。

「何ごとだ？」

後ろから父も現れる。晃弘に聞かれたくはないが、父には言わざるをえない。

何も正月早々、こんな書留かきどめを送らなくてもいいのに。蒼恋はそう思いながら、諦めあきらめの境地でうつむいた。

「私……内定、取り消しだって……」

蚊の鳴くような声とともに蒼恋が差し出した用紙を、母が受け取った。父とふたりで何かを言っているようだが、蒼恋の耳には入らない。それよりも黙っている晃弘のことが気にかかる。呆れられたらどうか。ダメなやつだと思われるだろうか。彼の表情を見るのが怖い。

蒼恋の胸がずきずきと痛み、体がふらふらしてきた。

「ごめん。私ちよっと、部屋にいつてるね」

姉夫婦や姪っ子がいるリビングに今は戻りたくない。

蒼恋は無理やり笑顔を作って父母に笑いかけた。だが、晃弘にだけはどうしても顔を向けられない。

「蒼恋、待って」

一步踏み出した蒼恋の二の腕を晃弘が掴つかむ。

「な、何？」

思わず、うつむいていた顔を上げてしまった。

彼は切羽詰せつぽまった表情で自分を見つめている。こちらが苦しくなるくらいに切ないこの表情を、蒼恋はずっと前に見たことがある。あれはいつだったか――思い出そうとしたときだった。

「俺と結婚しよう、蒼恋」

「え？」

「俺と結婚してほしいんだ」

「ちよつ、え？ は……？」

蒼恋は自分の耳を疑った。

十年以上も片思いをしている相手が、現在進行形で懂れている初恋の人が、自分と結婚をした  
い……？

「あ、晃ちゃん、ちよつとあなた、どうしたの？」

「何を言ってるんだ、晃ちゃん。正月早々、冗談きついぞ」

父母が焦った声を出す。騒ぎを聞きつけた晃弘の父もやってくる。

蒼恋も両親の意見に同感だ。

晃弘の言動は正月の酒を飲みすぎて酔っているせいだと思った。

だが、彼の顔色はいつもと同じだ。そういえば彼は酒を勧められても遠慮をし、今日は大切なこと  
があるからと言っていた。服装もスーツ姿で、仕事があるのだらうとみんなで勝手に解釈してい  
たのだ。

「晃ちゃん、あの、嘘でしょ……？」

見上げると、晃弘は真剣な表情で蒼恋を見つめ返している。

「俺は冗談も嘘も言ってない。本気なんだ。俺がこつちに戻ってきたら、蒼恋と一緒に住みたい家  
も、めぼしをつけてある」

「え、ええっ！」

「蒼恋、これを見て」

晃弘はジャケットの内ポケットから白い封筒を取り出し、それを蒼恋の手に持たせる。言われる  
がままに蒼恋は一枚の紙に目を落とした。

初めて見る用紙だ。何が書かれているかを確認して愕然とする。

「これ、こつ、婚姻届だよ！」

「俺の名前は書いておいた。あとは蒼恋の名前と、保証人だけだ」

確かに「野田晃弘」と記入されていた。用紙を持つ蒼恋の手が震える。

「俺の気持ちの本気だって、わかってくれた？」

「わ、わかった、って、だって、あ、あの」

あたふたする蒼恋の肩を、晃弘の大きな手が強く抱いた。

「おじさん、おばさん。俺に蒼恋をください」

ようやく騒動が収まったころには、もう夜になっていた。

蒼恋はパニックになりながらも、晃弘のプロポーズを受けた。断る理由などどこにもなかったか  
らだ。

蒼恋の父は、娘可愛さに最初は反対の姿勢を見せた。だが、どうせいつか結婚するならば知らな  
い男に持っていかれるより、幼いころからよく知る晃弘のほうが安心だという結論に落ち着いたら

しい。しばらくすると、賛成してくれた。

落合家と野田家は特に父親同士の仲がいい。ふたりの父親は互いが親戚になることを喜び、晃弘と三人で酒を酌み交わした。

蒼恋の長年の片思いを知っていた母と姉は、もちろん大喜びだ。

たった半日の間に、蒼恋はやつとの思いで得た内定を取り消され、片思いしている幼なじみにプロポーズをされ、そして結婚が決まった。いずれも、まだ信じがたいことばかりだ。

「長々とお邪魔しました」

玄関で晃弘と彼の父を見送る蒼恋は、まだふわふわと夢見心地でいた。

「晃ちゃん大丈夫？ ふたりとも泊まっていってもいいのよ？」

蒼恋の母が晃弘に声をかける。

「大丈夫です。お騒がせしてすみません」

酔った自分の父親に肩を貸しながら、晃弘が頭を下げた。蒼恋の父はリビングで大いびきをかいて寝ている。ふたりとも飲みすぎだ。

「本当に突然すみませんでした。でも俺は本気ですので……よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくね。晃ちゃんなら私も安心よ」

母が微笑む。うなずいた晃弘は、顔だけ蒼恋を振り向いた。目を細めて自分を見る晃弘に、胸がどきりとする。

「蒼恋、驚かせてごめんな」

「う、うん。……ううん」

こういう顔をしていいのかわからず、こくこくとうなずくしかできない。

「じゃあな、おやすみ」

「おやすみなさい、晃ちゃん」

晃弘を見送った蒼恋は、二階の自室に駆け上がる。落ち着かない気持ちとともに、勢いよくベッドに倒れこんだ。

「……信じられない。信じられない……！」

宝物のぬいぐるみを、ぎゅううつと抱きしめる。このぬいぐるみは、蒼恋が小学一年生のときに晃弘がプレゼントしてくれたものだ。彼は当時、高校生だった。

それは、蒼恋の七歳の誕生日のこと。急に両親が親戚の家にかねばなくなり、姉の友里恵と晃弘が蒼恋を預かって、遊園地へいくことになったのだ。だが遊園地に着くや否や、友里恵は待ち合わせていた彼氏とどこかへ行ってしまった。結局、晃弘と蒼恋のふたりで遊園地を回ることになったのだが、晃弘はいやな顔ひとつせず蒼恋と遊んでくれた。それどころか蒼恋の好きなキャラクターを覚えていて、誕生日のプレゼントとしてこのぬいぐるみを買ってくれたのだ。

ぬいぐるみを渡されたのは遊園地の片隅にある植物園。大きなサボテンと色鮮やかな花々、ひらひらと蝶が飛びまわる印象的な場所だった。

家族がそばにいないことで不安だった蒼恋の心に、晃弘の優しさが広がり、涙があふれたことを今でも思い出す。

そのときから蒼恋にとって晃弘は「おとなりのお兄ちゃん」というだけではない、特別な人になった。彼に、恋心を抱いたのだ。

母のいない晃弘は幼いころから蒼恋の家に呼ばれ、よく一緒に食事をした。晃弘が大学へ入ってからはその機会がずいぶん減ってしまったが、代わりに正月と盆休みに彼の父とともに蒼恋の家にきて、一日をすごす習慣が続いている。

友里恵と晃弘は同級生の幼なじみだが、互いに恋愛感情を抱いたことはないらしい。姉はとつくと結婚して、子どももいる。

そして蒼恋はといえば……晃弘に完全に子ども扱いされ、よくて妹くらい存在だと思われていたはずなのだ。

なぜなら四年前、蒼恋は晃弘にすっかりフラれているのだから。

あれは、蒼恋が高校三年生の冬。

厳しい寒さの続く二月中旬、ようやく待ち人が車で帰ってきた。蒼恋は急いで自宅の玄関を出る。夜の空気は頬を刺すように冷たく、すでに街灯は橙色（オレンジ色）の光を家の前に落としていた。

となりの野田家の表札の前で立ち止まると、車から彼が降りてくる。

「晃ちゃん、お帰り」

「蒼恋？ どうしたんだ、こんな夜遅くに」

晃弘は驚いた顔で駐車スペースから出て、蒼恋に駆け寄った。コートとビジネスバッグを携（たずさ）えた

晃弘のスーツ姿に、蒼恋の胸がきゅつと痛くなる。

十歳年上の初恋の人が客観的にも素敵な男性だと気づいたのは、蒼恋が中学一年のときだ。家に遊びにきた同級生が、偶然見かけた晃弘を格好いいと騒いだのである。

晃弘は身長が高く細身で、何を着てもよく似合う。サラリとした清潔感のある黒髪、涼し気な瞳、鼻筋は通っていて、薄い唇は形がいい。誰が見ても素敵な男性に違いないのは確かだ。

それに、性格もよい。

蒼恋を見守る彼の表情はいつでも優しくかった。だが、それは幼い子どもを見るかのように心配いで――

いい加減に子ども扱いをやめてほしくなった蒼恋は一大決心をし、彼を待っていたのだ。

「渡したいものがあつて待ってたの」

「ずっと外にいたのか？」

「ううん、家の玄関にいた」

「玄関だって寒いだろ。ほら、こんなに冷えてるじゃないか」

晃弘の指が蒼恋の頬に触れる。とたんに顔が、かっと熱くなった。仄（ほ）かに香る大人のフレグランスが蒼恋の鼻先をくすぐる。

「だ、大丈夫。晃ちゃん、あの……これ。受け取って」

手作りしたチョコレートの入る箱を晃弘に差し出した。言葉とともに吐き出された真っ白い息が闇に溶けていく。緊張と恥ずかしさで、寒さどころではないのだが。

「……バレンタインか、ありがとう」

綺麗に包装した箱を受け取った晃弘は、一瞬戸惑った表情を見せた。それにかまわず、蒼恋は口をひらく。

「晃ちゃん、私ね。晃ちゃんのこと——」

「あのさ、蒼恋」

「どうして最後まで聞いてくれないの？ やっぱり今回も、拒否る……？」

続きを聞きたくなかった蒼恋は、晃弘の言葉を遮った。

蒼恋は晃弘に恋心を抱いた小学生のころから、毎年チョコレートを渡し続けている。

中学三年のバレンタインにはチョコレートと一緒に「晃ちゃんのことを好き」と告白した。だが当然のように優しくかわされる。それは本当の恋ではないのだと、諭された。

だから、その後のバレンタインでは、晃弘の迷惑にならないようにと何も渡さないでいた。しかし我慢すればするほど蒼恋の恋心は膨らみ、気持ちを告げずにはいられなかったのだ。

「……もう遅いから家に帰る。寒いだろう？」

「答えてくれたら帰る」

蒼恋は口を引き結び、晃弘を強く見つめた。その視線から逃れるように晃弘が顔をそらす。

「拒否るも何も……高校生に手は出せません。蒼恋だって俺の年、わかってるよな？」

「にじゅう、はち」

「正解」

「私が高校生じゃなければいいの？ もうすぐ卒業するんだよ？ そのあとならいいの？」

蒼恋は必死に言い募る。

「蒼恋は俺のこと何も知らないだろう？」

「え？」

「俺に夢見すぎだよ」

晃弘は苦笑した。

「蒼恋のそれは、多分違う『好き』なんだよ。大学に入って、蒼恋と同じ年くらいの男と一緒にいれば、これが本当の恋じゃないってわかる」

「中三のときも晃ちゃんに同じこと言われたけど、私の気持ちは変わらなかったよ？ 高校に入っても、男子と一緒にいても、やっぱり晃ちゃんのこと——」

「……」

「好き、なの」

彼が困っているのがわかる。

「今日、彼女という遅かったの？」

「彼女はいないけどさ」

困らせているのに、止まらない。どうしようもなくて、聞きたくないことまでぶつけてしまう。  
「前にいたでしょ……？」

「とっくに別れてるよ。今は仕事が忙しくて、そんなヒマはない」

「そうなの？」

「蒼恋」

晃弘が真剣な顔つきになった。その瞳と声色が、蒼恋の胸を震わせる。それは、苦しくなるほどに切なげな表情だった。

「俺、三月に名古屋にいくんだ」

「え!？」

「会社に新店舗ができて、その売り上げに貢献するために派遣されることになった」

「出張じゃなくて？」

不動産会社に勤める晃弘は、営業の成績がとていいのだと父から聞いていた。

「ああ、出張じゃない。少なくとも三、四年は東京に帰ってこないと思う」

頭を殴られたような衝撃が走った。

三、四年ということは、蒼恋が大学を卒業するまでだ。

「嘘……」

「嘘じゃないよ。もう住む部屋も決まってる」

（そんなの、いや！）

思うと同時に蒼恋は晃弘の胸に飛びこんでいた。彼の手から鞆とコートが離れ、地面にどさりと落ちる。

「私、待ってちゃダメ？」

細身に見えていたが、やはり男性なのだ。硬くてしつかりとした晃弘の胸に触れた蒼恋は、こんなときなのに意識してしまう。間近に迫る晃弘の香りが、蒼恋のあふれる気持ちを押し上げた。

「私、晃ちゃんが好きなの。ずっとずっと、好きなの。それはこれからも変わらないよ。変われないよ……!」

晃弘が遠くにいつてしまう。

大学にいつても、就職しても、となりにいた晃弘が。蒼恋の手の届かないところへ……

想像するだけで耐えられないくらいにつらかった。胸がずきずきと痛み、息苦しい。

「蒼恋」

「私、もう十八歳だよ？ そんなに子どもっぽい？ 可愛くない？ 晃ちゃんの好みじゃない？」

「そんなことないよ。蒼恋は十分可愛いと思う」

「だったら――」

言いかけた蒼恋の体を、晃弘の手がそっと抱きしめる。それは驚く間もないほど、ほんの一瞬のできごとだった。晃弘の両手はすぐに離れ、蒼恋の両肩を掴む。

とても強い力だ。

「蒼恋。早く大人になれ。そしたら」

「そしたら……?」

「……なんてな。ごめん」

蒼恋の両肩を掴んだまま、晃弘がうつむく。どういう意味かわからず、蒼恋は黙って彼を見つ

めた。

「俺に蒼恋を縛ることはできないよ。大学でいろんな人に出会って、将来のために勉強して、めいっぱい大学生活を楽しんでおいで」

「晃ちゃん」

「ほら、家に入るとこ見ててやるから。もういきな」

蒼恋を離れた晃弘は、落ちていたコートと鞆を拾った。

家の前を自転車を通りすぎる。ぎーこぎーこと、ペダル音が夜の空気に響いた。

「おやすみ、蒼恋」

「……おやすみ、なさい」

「ありがとな」

眉根を寄せて無理に微笑んだ晃弘の顔が、蒼恋の胸に突き刺さる。

自分のことはいい加減に諦めろという表情なのだと理解した。

それでも蒼恋は大学に入ったこの四年間、一度も晃弘を思わずにいられた日はなかった。

受け入れてもらえないのはわかっているけど、彼が帰ってくるのを待ちわびてすごしていたのだ。

とはいえ、もう自分の気持ちを押しつけることはしない。ただ胸のなかでひっそりと思い続けていた。

だから、晃弘の突然のプロポーズに蒼恋は混乱してしまった。

そんな彼女をよそにプロポーズのあと、晃弘は改めてその場にいるみんなに挨拶をした。

彼は蒼恋のことをずっと妹のように思っていたが、彼女が高三のときに真剣な告白をされ、動揺したという。その気持ちが本気なのかを確かめるために名古屋への転勤を決めたそうだ。そして、その後誰とも交際をせずに、蒼恋を好きだという気持ちを持ち続けていたと説明する。

さらに、いまだに蒼恋が晃弘のことを好きで、誰かに告白をされても彼氏を作らないと友里恵から聞き、心を決めたこと。蒼恋の気持ち次第だが、蒼恋が就職しようがしまいが、プロポーズをしようとしていたこと。だから今日はスーツを着てきたのだということを語ったのだ。

晃弘の話は全て、蒼恋が初めて聞くものだった。

内定を取り消された自分に同情しただけなのかもしれないという不安は、その場で晃弘に否定された。

「私が、晃ちゃんと結婚……？」

ぬいぐるみを手にしたまま、蒼恋はごろごろとベッドの上を寝転がる。

（本当に本当なの？ 晃ちゃんが私と結婚だなんて……！）

幼いころから晃弘のお嫁さんになることが夢だった。それは叶わないのだと、自分に言い聞かせていたのに。

夢ならどうか覚めないで――

蒼恋は再びぬいぐるみを強く抱きしめ、晃弘のプロポーズの言葉を何度も胸の中で繰り返した。

プロポーズをされた直後から、とんとん拍子に結婚話は進んだ。

蒼恋の大学卒業を控えた、三月初旬の水曜日。晃弘の休日に合わせて、ふたりは打ち合わせのために目黒の挙式会場へいく。

打ち合わせはスムーズに終わったものの、衣装の試着は予約の時間をすぎて始まった。最近はず月に挙式を行うカップルが増え、今日は一日中、衣装合わせの予約がいっぱいだったらしい。

ようやく蒼恋たちの番になり、まず晃弘から試着を始めた。待ち時間に選んでいた衣装だ。「よくお似合いですよ。ご新婦様もご覧ください」

店員に促され、晃弘が試着室から出てくる。

「あ……」

晃弘の新郎姿は、蒼恋の胸を一瞬でときめかせた。

彼は身長が百八十センチある。蒼恋とは二十センチの差だ。濃いグレーのフロックコートが、晃弘の体型にぴったり合っていた。あまりに似合いすぎていて目が離せない。

「黒と迷ったんだけど、こっちのほうがイイ感じだったから」

少々照れくさそうにした晃弘が蒼恋の前までやってきた。

「晃ちゃん、すごく似合う。王子様みたい」

「よせて、恥ずかしいよ」

「だって本当だよ」

蒼恋がつぶやくと、珍しく晃弘が顔を赤くして狼狽した。その意外な反応が可愛く思えて、蒼恋

は思わずクスッと笑う。

「蒼恋は選んだのか？」

「たくさん着てみたいのがあって、迷っちゃって……」

「全部着てみればいいよ」

「いいの？」

「一生に一度なんだから後悔しないように着るよ、な？」

「うん、ありがとう」

晃弘と入れ替わりに、蒼恋は店員と広い試着室に入る。

選んでおいた五着のドレスは、ボールにかけられていた。美しく並んだドレスに胸がときめく。穿きやすいようにふんわりと広げられた真っ白いシルクのドレスに足を入れた。店員に着るのを手伝ってもらったが、長いドレスは想像以上に重たい。

素敵だと思ったのに、鏡に映った自分の姿はしっくりこなかった。

「ご新郎様にお見せしますか？」

「あ、ちょっと待ってください。こっちじゃなくて、やっぱりそっちがいいです」

晃弘にあまり似合っていないドレス姿を見せたくはない。

ドレスを脱ぎ、また別のドレスを着た。店員の手を借りながらとはいえ、慣れないことに手間取る。そして着てみたドレスは、サイズが合わなかった。肩のラインがどうしても滑り落ちてしまうのだ。諦めてまた別のドレスの支度を始める。あと少しで終わる、というところでカーテンの向こ

う側から晃弘の声が届いた。

「蒼恋ごめん、ひとりで選べるか？」

「え？」

「俺、これから東京駅で取引先の人と会う約束してるんだ。もういかないとならない」

そんなことは聞いていない。蒼恋は店員にドレスの裾すそを持ってもらい、急いでカーテンのそばに移動した。

「好きな選んでいいからな」

「ちょっと待って、晃ちゃん」

試着室のカーテンから顔だけ出す。近づいてきた晃弘が、申し訳なさそうな表情で蒼恋の頬を撫でた。

「こんなに時間がかかるとは予想してなかったんだ。試着が終わったら蒼恋と一緒にいって、向こうで少し待っててもらおうかと思ってたんだよ、ごめん。蒼恋のドレス姿は、当日までのお楽しみにとっておくから」

晃弘は貴重な休みを削って、名古屋から東京に出てきている。そのうえ、こちらでも仕事がある。その大変さを思うと、わがままは言えない。

蒼恋は「いやだ」という言葉を呑みこみ、笑みを浮かべた。

「わかった。お仕事頑張ってるね」

「ありがとう。一時間くらいで終わるから、そのあとで一緒にメシ食おう。あ、新居に入れる家具

も見るんだったよな？」

「うん」

先日、代官山だいかんやまに新居が決まった。前から晃弘がめぼしをつけておいたというメゾネットタイプのマンションだ。実際にふたりが住むのは挙式後だが、来月には入居できるので、早めに家具を見ておこうと話していた。

「じゃあすみませんが、お願いします」

そばにいた別の店員に、晃弘が頭を下げた。

「かしこまりました。ご新婦様の試着のお写真は、こちらでお撮りしておきますので」

「ありがとうございます。じゃあな、蒼恋。あとで」

「いつてらっしゃい」

「ほんとにごめんな。スマホに連絡入れる」

急ぐ晃弘の背中を見送った蒼恋は、店員に気づかれないよう小さく息をついた。

不満を感じるのはわがままなのだが、胸のなかにもやもとしたものがある。今のことだけじゃない、結婚が決まってそのあとからずっと……引っかかっていることがあるのだ。

数時間後、晃弘から連絡が入る。蒼恋が東京駅に到着すると、待っていた晃弘が何度も謝った。呆れるくらいに繰り返し謝るので、蒼恋は笑ってしまった。

胸のややもやはさておき、今はまだ、たまにしか彼と会えないのだ。限られた時間を楽しくすご

すために気持ちを切り替え、晃弘と一緒にインテリアの店を訪れた。

「蒼恋の好きに決めていいよ」

「いいの？」

「俺はセンスないからな。蒼恋に任せるよ」

ふかふかのソファやダイニングテーブル、座りやすそうな椅子に大きなベッドが、広いフロアに陳列されている。真新しいそれらを見て、蒼恋の胸が躍った。

新居の間取り図を手にあちこち見て回る。図は晃弘が用意してくれたもので、細かい場所の長さや高さが書きこまれたものだ。

「すごく素敵」

蒼恋はリビングへ置くのによさそうな、小ぶりのソファに近づいた。

「それいいね。こっちもあるよ」

晃弘がとなりに並ぶ同じ大きさのソファを指さす。

「その色より、淡い色のほうが部屋が広く感じるんじゃないかな。あと、ソファの脚も……こっちのほうがすっきりして見えると思う」

「ああそうか、なるほど。よくそんな細かいところまで気づくなあ」

彼に誉められて照れながら、今度はダイニングテーブルや食器棚のあるコーナーに移動する。置かれたものを確認してつぶやいた。

「ここにあるのは買えないかな」

「え、なんで？」

驚く晃弘に、蒼恋は図面を見せて説明する。

「ダイニングテーブルは、少し狭いけどこっちのスペースに置くのが一番いいと思う。でもお店にあるのはどっしりした大きいものが多いから、ネットで探したほうが早い気がする」

「へえ、そうなのか」

「食器棚は、こういうのがいいな」

蒼恋は、別の場所にあった背の低い扉付きの棚を指さす。

「それ、普通の棚じゃないのか？」

「うん、普通のがいいの。晃ちゃんと私のふたりなら、これで十分。もしこの先、大きな食器棚が必要になったとき、この棚は別の用途で使えるでしょ？ 本棚でもタオル入れでもなんにでもなるから、無駄がないかなって」

「なるほどなあ」

その後も、部屋の照明器具や収納場所など、蒼恋の提案に晃弘はいちいち感心した。生活に利用しやすいように、部屋が広く明るく見えるようにと蒼恋が考えたことは、彼には思いつかないことだったようだ。

いつも頼ってばかりいる晃弘に本気で誉められ、蒼恋は嬉しかった。そして自分の気持ちに気がつく。

「どうした、蒼恋？」

「私、こういうのを考えるのが、好きなのかもしれない」

「こういうのって、インテリア？」

「そう。一度も家を出たことがないから今まで気づかなかったけど、家のなかのことを考えるのってすごく楽しい」

「そうか、新たな発見だな。俺も蒼恋の新しい一面を知れて、嬉しいよ」

笑った晃弘が蒼恋の頭をぼんと撫でた。

蒼恋は自分のなかに生まれたこの気づきを、なんとなく……大切にしてみようと思った。

インテリアを見終え、夕食はイタリアンの店に入る。

白ワインで乾杯をした。口当たりがフルーティで飲みやすい。

「お仕事、忙しいんだね」

蒼恋はつい、口に出してしまった。

ここに着くまでに、晃弘の携帯に何度か仕事の電話が入ったのだ。

「名古屋のお客さんの引継ぎと、こっちでかわる業者との打ち合わせが同時進行だからな。もしかすると、今後の結婚準備を蒼恋に任せることが増えるかもしれない。なるべく参加できるようにするけど……」

ワインを飲みながら、晃弘が心配そうに蒼恋を見る。

「うん、任せて」

「大丈夫か？」

「大丈夫だよ。私は時間がたっぷりあるんだもん」

（いつまでもこんなふうに子ども扱いされるのはいや。大人の彼に釣り合う女性になるためにも頑張らないと）

そう決意し、蒼恋は笑顔を作った。

晃弘を安心させようと、ゆったりとした態度で食事を続ける。

アンティパストの鰯のマリネは、ほどよい酸味がきいていた。ゴルゴンゾーラの Pasta は濃厚なチーズが絡めてあり、舌までとろけてしまいそうだ。ほどよくレアに焼かれた和牛ロース肉のタリアータは、たっぷりのサラダと一緒に頬張る。

おいしいねと微笑み合った。

けれど、いい雰囲気とワインのほろ酔いから、蒼恋は気になっていることを確かめてしまう。

「晃ちゃん、今夜はこっちにいろの？」

「ああ、実家に泊まるよ。明日の午前中はこっちで少し仕事をして、午後は名古屋で仕事だ」

「……そう、なんだ」

「どうした？」

「う、ううん。なんでも」

蒼恋は恥ずかしさに顔をほてらせてうつむいた。

このあと一緒にどこかへ泊まろうか、などという言葉を、ほんの少しでも期待した自分がいやになる。彼は忙しいのだから、これ以上拘束できないのはわかっているのに……寂しい。

蒼恋は黙って食後のドルチェを口に入れた。アフオガートが舌の上で甘く溶け、ほんのりとした苦みを残す。

食事を終えたふたりは電車に乗り、実家の最寄駅からタクシーで帰った。嬉しかったはずのとなり同士がこんなときは恨めしい。どこかに遠回りしたいと言いたくても、言えないのだから。

タクシーから降りた晃弘は蒼恋の家の前で立ち止まった。

「見てやるから、早く入りな」

何度も聞いたその言葉に子ども扱いされていることを再び思い知らされ、蒼恋は自嘲したくなる。

「おやすみ、蒼恋」

「おやすみなさい……」

玄関のドアを開け、家に入った蒼恋は絞り出すようにつぶやいた。

「私たちもうすぐ、結婚するんだよね？」

別れ際に甘い言葉をかけるとか、また会おうとキスをするとか、今夜は帰したくないと抱きしめるとか。恋人同士ならそれが普通なのではないか。蒼恋自身は一度も経験がないけれど、それくらいは知っている。

そう、蒼恋の心にずっと引っかかっているのは、プロポーズをする前となんら変わりのない、晃弘の穏やかな態度だった。

キスすらしないなんて、晃弘は本当に自分のことを好きなのだろうか――

蒼恋は不安をおおられた。

「お帰り、蒼恋。お風呂沸いてるわよ」

リビングでは母がテレビを見ている。

「ただいま。お父さんは？」

「飲み会で遅くなるそうよ。晃ちゃんと一緒に帰ってきたの？」

「……うん。ねえ、お母さん」

バラエティ番組を見て笑っていた母は、蒼恋の声に振り向いた。

「どうしたの？ 何かあった？」

不安を母に相談しかけるも、思いとどまる。

「う、ううん。そうだ、明日お料理教えてくれない？」

「いいわよ！ そうよね、もうすぐ奥さんになるんだものね。何か覚えたメニューはある？」

「晃ちゃんはお母さんの味に慣れてるだろうから、なんでもいいよ」

「あら、嬉しい。じゃあ何にしようかしら」

「着替えてくるね」

蒼恋は急いで二階の自室に入り、スマホで大学の友人たちにメッセージを入れる。内容は「晃弘が全く手を出してくれない」という愚痴だった。

グループ内でやり取りをするのは、愛理と礼奈、唯香。なんでも話せる気が置けない友人だ。すぐにメッセージが返ってくる。

『いくらなんでも、結婚間近なのに、何もしないっていうのはおかしくない？』

『蒼恋が小さいころから一緒だから、そういう対象に見づらいのかもね。周りに大人の女性がいる晃ちゃんから見たら、子どもっぽいと思われるのかも』

『プロポーズを試してみたものの、保護者気分が抜けないとかね？ 蒼恋の就職がダメになってかわいそうだったから結婚を申しこんだんじゃないよね？』

いろいろな意見が飛びかう。彼女らが思案してくれているのはわかるのだが……蒼恋は泣きそうだった。

（晃ちゃんは私の就職がダメになったのを知る前から、プロポーズを考えていたと言っていた。だから同情で結婚するわけじゃないよね？）

嬉しいはずの結婚が不安でしかたがないのは、自分に自信がないからだろうか。

これが贅沢な悩みだというのはわかってる。わかっているのだが……

（こんな不安な思い、晃ちゃんからのたったひとつのキスがあれば、きっと全部消し飛ぶのに）

いつまで待てば、いいのだろう。

胸のなかにあるもやもやしたものがいつまでも離れず、その日蒼恋は明け方まで眠りにつくことができなかった。

五月晴れの日曜日。いよいよ今日は晃弘と蒼恋の挙式だ。

挙式前のほんのひととき。

アンティークの調度品が並ぶ部屋は、とても静かだった。花嫁の支度を終えた蒼恋は飴色の椅子に座り、レースのカーテンがそよ窓の外を見つめる。

視線を膝に下ろすと、オーガンジーのドレスが目に入った。真っ白でふわふわをつまんで引つ張り、裾に施された繊細なレースから白いパンプスの先を覗かせる。ヘリンボーンの床に窓から入った木漏れ日が落ちていた。

無垢な白さに全身を包まれた蒼恋は、小さく深呼吸する。

（とうとうキスすらしないままこの日を迎えてしまった。だけど、私は晃ちゃんを信じよう。このドレス、気に入ってくれるといいな）

晃弘に試着の画像は見せたが、実際に披露するのは初めてなので緊張する。

あれこれ迷って蒼恋が選んだのは、プリンセスラインのオーガンジードレスだ。オフショルダーの胸もとと裾がレース仕立てになっている。清楚な雰囲気がとても気に入る、このドレスに決めたのだ。

今日まで、本当に慌ただしい日々だった。

特に、忙しかった晃弘の代わりに家電や食器、寝具類など、生活に必要なものをひとりで選ぶのが大変だった。

五月に入ってすぐに籍を入れ、細かい手続きは全て済ませてある。だからすでに「野田蒼恋」なのだが、生活をともししているわけではないので、まだ晃弘の妻であるという実感が湧かない。

ただ、晃弘が四月の中旬に実家に戻ってからの一ヶ月は、とても楽しくすごせた。ふたりでさま

さまざまなことを決め、新居の準備をする。その帰りに食事にいったり、映画を見たり、短い時間だがドライブもできた。

そして晃弘は、蒼恋の肩を抱いてくれるようになったのだ。未だにそこ止まりではあるが、自分のためにゆっくり進んでくれているのだと、蒼恋なりに理解している。大切にされているからこそなのだと。

（もうなんの不安もないじゃない。キスすらしてないけど戸籍上は夫婦なんだし、これからみんなの前で結婚式。そして今夜は……とうとう晃ちゃんの本当のお嫁さんになるんだから）

ドアがノックされる。蒼恋の心臓がどきんと鳴った。

「失礼いたします。ご新郎様がいらっしゃいました」

「あ、はい……！ どうぞ」

さあどうぞ、という介添えの声とともにドアがひらいた。グレーのフロックコートの胸にブートニアをつけた晃弘が入ってくる。

蒼恋と視線が合った彼は、その場で立ち止まった。何も言わずにただ、蒼恋を見つめ続けている。

「晃ちゃん？」

「あ、ああ。蒼恋……き」

こちらへ一歩踏み出した晃弘が、何かを言いかけたそのとき。

「蒼恋っ！」

晃弘の後ろからモーニング姿の蒼恋の父が飛びこんできた。

「蒼恋お前、綺麗だなあ、うん、うん……！」

「あ、ありがとう、お父さん」

父の勢いにうろたえる蒼恋のそばに、晃弘もくる。

「お父さん、まさかもう泣いてるんじゃないでしょうね」

「う、うるさい」

一緒に入ってきた蒼恋の姉、友里恵が父の顔を覗く。クスクスと笑う姉とは対照的に、父の目は真っ赤だ。そんな父を見た蒼恋の胸に、熱いものがこみ上げる。

「蒼恋、すごく綺麗だよ。晃ちゃんも格好いいね！」

「おう、ありがとな」

晃弘が照れくさそうに友里恵に笑う。それを見た蒼恋も釣られて笑うことができた。式の前から泣いていてはそのあとが大変だ。

「蒼恋のことよろしくね、晃ちゃん」

「ああ。任せて」

笑みを交わし合うふたりの言葉が嬉しかった。

「ちよっとお父さん、これからバージンロード歩くんでしょ。しっかりしてよ？」

ハンカチで目頭を押さえる父の背中を母がさする。母は姪っ子と手をつなぎ、蒼恋のそばにきた。友里恵の夫も一緒だ。

「綺麗よ蒼恋。本当に素敵。晃ちゃんと幸せだね」

「お母さ、ん……」

母の泣きそうな笑顔を見て、我慢していた蒼恋の目に涙があふれる。

「ダメよ、蒼恋。綺麗にもらったんだから。お化粧流れちゃうわよ」

「うん……」

実は今朝、家を出る前に父母には挨拶をしている。そのときはお互いにあっさりしたもので、涙など出なかった。いつでも帰ってくればいいじゃないか、遊びにいくからね、などと笑顔で言葉を交わしたのに。今は胸がしめつけられて、どうしようもない。

「蒼恋ちゃん、幸せにね」

「あおちゃん、ドレス綺麗」

「ありがとう、お義兄さん。梨乃も、ありがとう」

姪っ子の梨乃が小さな手で白いドレスに触れ、につこりと笑った。涙を拭いた蒼恋も笑顔で返す。

「晃ちゃん、今日はよろしくお願いしますね」

「はい。こちらこそよろしくお願いします」

「晃ちゃんが旦那さんだと思うと、今日も安心だわ、ふふ」

さっと涙を拭いた母は、晃弘と笑い合っている。蒼恋は自分と晃弘が家族になることを、ようやく実感し始めていた。

「蒼恋ちゃん、晃弘をよろしくね」

「はい、お義父さん……!」

あとから部屋に入ってきた晃弘の父が蒼恋に優しく微笑む。ずっと「おじさん」だった人を「お義父さん」と呼ぶのは、くすぐったい感じだ。

「ご新郎様とご新婦様のお写真をお撮りしますので、ご親族の方は控室に移動をお願いいたします」

スタッフの声がかかる。

「じゃあね、蒼恋。緊張したら手のひらに人の文字を書くのよ」

「わかった。ありがとう、お姉ちゃん」

経験者の言うことは素直に聞いておこう、と蒼恋は小さくうなずいた。

「すみません、少しだけふたりにしてもらえますか。すぐに終わるので」

「かしこまりました」

家族が出たあと、ドアのそばにいた介添えに晃弘が申し出た。どうしたのだろうか。

椅子に座ったままの蒼恋は彼の背中に視線を置いた。ふたりだけの部屋に小鳥のさえずりが響く。

「蒼恋」

晃弘は蒼恋の前でひざまずき、そっと手を取った。

「どうしたの?」

「さっき、ドレス似合ってるよって蒼恋に言おうと思ったんだ。お義父さんに先を越されちゃったけど」

「ほんと?」

握られた手を、握り返してみる。晃弘は応えるように強く握り返してきた。

「ああ。ドレス一緒に選んでやれなくてごめん。本当によく似合ってるよ」

「嬉しい。晃ちゃんはやっぱり、王子様みたいだよ」

蒼恋がそう言うのと、目を細めた晃弘は顔をそらした。試着のときにも「王子様みたいだ」と言っ  
てしまったのだが、子どもっぽい発言だったろうか。いやがられたかもしれないと心配した蒼恋の  
耳に、晃弘のつぶやきが届いた。

「蒼恋が綺麗すぎて……緊張してきた」

「え」

「早くみんなに自慢したいような、誰にも見せたくないような、複雑な気持ちだ」

顔を上げた晃弘に蒼恋は瞳を捉えられる。

「それを言いたくてふたりにさせてもらったんだ。世界一綺麗だよ、蒼恋」

「晃ちゃん……！」

晃弘の言葉が蒼恋の全身に魔法をかける。心も体も幸せのベールに包まれたような心地だ。  
顔を赤くした晃弘が、上目遣いに蒼恋を見つめた。彼のこういう表情を見るのは初めてだ。蒼恋  
の胸が甘酸っぱくときめく。

「今日はよろしく願います、蒼恋」

「こちらこそ、願います、晃ちゃん」

笑みを交わすと、少し緊張が解けた気がした。

晃弘の手に掴まった蒼恋は、椅子からゆっくりと立ち上がる。ドレス姿で体勢を変えるのは想像  
以上に大変だ。彼にエスコートされながら、お支度の部屋を出た。

穏やかな陽が高く上る正午すぎ。美しいチャペルで挙式は執り行われた。

パイプオルガンが鳴り響くなか、蒼恋はバージンロードを父と並んで進む。親戚や友人らに見守  
られ父から晃弘に手を渡された蒼恋は、彼と目が合った瞬間、こみ上げる感情を抑えきれなくなっ  
た。瞳にあつという間に涙が溜まっていく。

誓いの言葉のあとで指輪の交換をし、ふたりは向き合った。

晃弘が蒼恋のベールを持ち上げる。

（私、みんなの前で晃ちゃんの奥さんになるんだ。晃ちゃんと一生添い遂げるために、愛を誓うん  
だ――）

ふたりの視線が合わさったあと、蒼恋の両肩に晃弘の両手がのせられる。

蒼恋を見つめる晃弘の表情は、見たこともないくらいに真剣だ。その瞳に熱がこもっているよう  
に思うのは蒼恋の願望なのだろうか。

時が止まったかのごとく彼のことしか見えない。讃美歌も、オルガンの音も聴こえない。ただ、  
晃弘でいっぱいになった蒼恋は、静かに目を閉じた。

晃弘の微かな息が蒼恋の頬を掠める。両頬に触れた唇の感触が、我慢していた涙をあふれさせた。  
幼いころから何度も夢見ていたシーンが、現実のものとなった瞬間。

微笑む晃弘に応えたいのに、蒼恋の胸は幸せに詰まり、涙しか出てこない。どうして彼の前だと、こんなに不器用になってしまふのだろう。

「蒼恋おめでどう！」

「おめでどう、蒼恋！」

挙式後チャペルを出たふたりは、外で待っていたゲストからフラワーシャワーを浴び、たくさんの祝福を受ける。五月らしいさわやかな風とキラキラした陽ざしのなか、ふわりと風に乗った花びらが地面へ零れ落ちていく。

「蒼恋、すっごく綺麗だよ！」

「幸せにね！」

「うん、ありがとう……！」

集合写真の撮影をする前に、愛理たちに取り囲まれる。

挙式が無事に済んでホッとした蒼恋は、彼女たちに笑顔で応えることができた。この前まであれこれ悩んでいたことが馬鹿みたいだ。大好きな人と結婚できて、みんなにお祝いしてもらって——蒼恋はこの上ない幸せをかみしめる。

午後二時になろうというころ、披露宴会場へと移動した。

入場とともに、たくさんのゲストに拍手で迎えられる。蒼恋の高校時代からの友人や、晃弘の会社関係者、学生時代からの友人がたくさん出席してくれた。

会場は壁の南側全面が窓になっており、天気の良い今日は、全て開け放たれている。窓の向こう

は緑いっぱいガーデンだ。お支度の部屋で聞いた小鳥の声が、会場内にも届いた。

テーブルに飾られているのは、季節に合わせてあしらわれた真っ白い花々とグリーン。会場全体の雰囲気もさわやかで明るく、気持ちがいい。

幸せなムードに包まれたまま乾杯をして、披露宴が始まった。

テーブルに創作和フレンチのコースが運ばれる。ひな壇にいる蒼恋と晃弘の前にも色とりどりの前菜が並んだ。

「晃ちゃん、これ、すごくおいしそうだね」

「ああ。食べるヒマはなさそうだけどな」

「私、意地でも食べるよ？」

「じゃあ俺も」

ふたりでこそっと話して、クスクスと笑い合う。そんな場面をカメラマンがすかさず撮った。

スピーチは晃弘の会社社長にお願いをした。社長の温かな言葉に蒼恋の心がほぐされる。晃弘の同僚たちの出し物に笑い、蒼恋の友人らの歌に酔いしれた。ふたりのもとへ次から次へとゲストがきて、挨拶をしたり写真を撮ったり……嬉しい慌たしさをめいっぱい楽しむ。

そうして、あつという間に披露宴は、最後のイベントへ。

蒼恋から両親への手紙だ。途中からボロボロと泣いてしまい、なかなか読み進められない。蒼恋の両親だけではなく、晃弘の父や会場の人たちまでも泣いているのがわかり、よけいに蒼恋の涙が止まらなくなった。

晃弘がさりげなく渡してくれた白いハンカチで涙を拭い、なんとか手紙を読み終える。

締めの新郎の挨拶は、ゲストへの感謝の気持ちと、ふたりの未来に向けての感動的な言葉だった。

そして、滞りなく披露宴が済んだ。

蒼恋と晃弘は控室でスイーツを口にしている。ゲストに配られたショートケーキや旬のフルーツを新郎新婦用に美しく盛りつけたものだ。披露宴後の疲れを癒やすための特別メニューである。

「おいしい！」

甘い苺のクリームが舌の上で滑り、喉の奥へ落ちていく。口に放りこんださくらんぼは甘酸っぱく、みずみずしかった。ホッとさせたせいもあるのだろう。あまりにもおいしくて蒼恋の手が止まらない。

「結局、料理はほとんど食べられなかったもんな。このあとすぐ二次会だけど、蒼恋、疲れてないか？」

敷地内の別の会場で二次会が行われることになっていた。披露宴のお色直しをした衣装のままで移動するので、とても楽だ。

「私は平気。晃ちゃんは？」

「俺も疲れてはないよ。ただこのあと……俺はかなり飲まされるだろうな。そういうメンバーがいるんだ」

晃弘が肩をすくめた。

「そうなの？」

「蒼恋には飲ませないようにするから、大丈夫」

「うん」

晃弘こそ大丈夫なのかと心配になる。彼は披露宴で、すでに結構な量を飲んでいたようだ。だが、顔色も口調も普段と全く変わりが無い。今も普通にスイーツを食べている。

蒼恋は、晃弘が酔っぱらっているところをほとんど見たことがなかった。彼は相当酒に強いのかもしれない。

あれこれ考えながら、蒼恋はもうひとくち甘いケーキを頬張った。

楽しい二次会も無事に済み、蒼恋と晃弘は会場からタクシーで帰路につく。

代官山の駅から徒歩十分ほどの住宅街にあるメゾネットマンションが、蒼恋と晃弘の新居だ。築年数は経っているが、落ち着いたモダンな造りが美しい。内見をしてひと目で気に入った蒼恋たちは、そこに住むことを即決したのだ。

タクシーを降りると、あたりはすっかり暗闇に包まれ、空にはいくつか星が見えた。二次会後もみんなと話を咲かせてしまい、だいぶ時間が経ってしまった。そろそろ九時になる。

「あれ……？」

晃弘がポケットを何度も探っている。

「どうしたの？」

「鍵、どうしたっけ」

「私がつってるよ。今日はとりあえず晃ちゃんのぶんも一緒にしておこうって、式の前に言っただしょ？」

「そうだったか。蒼恋はいい子だな」

にこにこ笑う晃弘が蒼恋の頭を撫でた。「いい子いい子」と何度もくりかえしている。

「いい子って……晃ちゃん、どうしたの？」

「んー……どうもしないよ」

小さな子ども扱いをされたみたいで複雑だ。それに、今までずっとしつかりした口調だったのでまるで気づかなかったが、彼は相当酔っているのかもしれない。いや、晃弘の予想通り、二次会であれだけ飲まされれば酔わないほうがおかしい。

蒼恋は注意深く晃弘の様子を窺いながら、マンションのドアを開ける。

新居に入ると知らない家の匂いがした。今日からここが、ふたりが暮らす家なのだ。改めてそう思った蒼恋は急にそわそわと落ち着かない気持ちになった。

すぐに生活が始められるように大体の準備はしてある。タオルやシーツなどは洗濯し、食器も洗って棚に入れておいた。明日からの新婚旅行の準備も済んでいる。

ふたりは披露宴から持ち帰った荷物を二階の寝室に運んだ。

寝室の真ん中にシンプルなシングルベッドがふたつ並んでいる。マットレスがぴたりとくっついているため、ダブルベッドのようだ。

これからここで初夜の本当の意味を知る。そんな想像をしまい、蒼恋の体中が熱くなった。

「蒼恋、酔ったのか？ 顔が赤いぞ？」

いつの間にか晃弘に顔を覗きこまれている。

「え！ だ、大丈夫だよ」

慌てて首を横に振り、蒼恋は顔をそらした。

晃弘はスーツの上着を脱ぎ、ベッドサイドの椅子に置く。そしてネクタイを緩め始めた。父とは全く違う、大人の男性を感じるその仕草に、蒼恋はいちいちドキドキしてしまう。

「蒼恋、先にシャワー浴びといて。俺は、ちょっと横になる」

「晃ちゃん……平気？」

「ああ。大丈夫だよ」

ベッドに仰向けになった晃弘は、大きく息を吐いた。少し酔いを醒ますのだろう。

蒼恋は階下へ下りてバスルームに入った。シャワーを浴び、新しいタオルで体を拭く。

寝室に戻る前に鏡で全身をチェックした。

ブライダルエステに通ったおかげで肌はつるつるしている。脱毛も完璧だ。

だが一番のコンプレックスである大きすぎる胸は隠してしまいたいし、ウェストだってもう少し細くなりたい。太ももは……などと言っていたらキリはないが、やはり見られるのは恥ずかしい。

それに、何をどうするのか予備知識だけはあるものの、この先は未知の世界だ。キスすらまだ経験をしたことのない蒼恋は不安でいっぱいだった。

洗い髪を乾かしながら何度も深呼吸をして、気持ちを落ち着かせる。

大好きな人と結婚できて、こういうことに至るのだから、幸せ以外の何ものでもない。全部の初めてを晃弘にあげることができるのだ。怖いことなんてない。びくびくしていたら、優しい彼は気を遣ってやめてしまうかもしれない。それだけはいやだ。覚悟を決めて彼のもとにいく。

蒼恋は意を決して、タオルを洗濯カゴに放りこんだ。

悩みに悩んで買った、白いレースが可愛い下着を、晃弘が気に入ってくれますようにと思いをこめて身につける。

(ウエディングドレスを替<sup>か</sup>めてくれたみたいに、綺麗だ<sup>は</sup>って言ってほしい)

パジャマを着た蒼恋は、ゆつくりと階段を上がった。心臓が痛いくらいに大きく鳴っている。

そっと寝室に入ると、ベッドに横たわる晃弘はさっきの格好のままだった。全然動かない。

「晃ちゃん。シャワー、お先に入りました」

「んー……」

目をこすりながら晃弘が頭を上げた。

「蒼恋、おいで」

「う、うん……!」

蒼恋を手招きしている。

静まらない心臓を押さえながら蒼恋はベッドに近づく。とたんに晃弘に強く腕を引かれ、ベッドに倒れこむように彼のとなりに横たわらされる。

晃弘は両手で蒼恋を優しく包んだ。

「今日は、疲れただろ」

「ううん、大丈夫。すごく楽しかった。晃ちゃんのお友だちや会社の人ともお話しできたし、みんなにお祝いされて幸せだった」

「俺も楽しかった。みんなに……蒼恋のこと、自慢できた……」

蒼恋のしつとりとした髪を、晃弘の大きな手が優しく撫でる。彼の白いシャツに顔を押しつけた蒼恋はその香りを吸いこんだ。何度も胸がきゅんとして、痛い。

シャツ越しに彼の心臓の音が伝わる。

高三のときに晃弘の胸に飛びこんだときよりも近い、彼の音だ。このあともっと、この音に近づく……

晃弘の肌を想像した蒼恋は、ひとりどきまぎしていた。

「いい……式だったな……うん」

低い声が間近で響く。

「あの、明日から旅行だね」

蒼恋は緊張のあまり、つい関係ないことを口走ってしまった。

「ああ。ゆつくり……寝ろな、蒼恋」

「え……?」

ゆつくり寝ろ? 寝ろというのは眠れということだろうか。

返事を待っても届くのは彼の呼吸だけ。まさか。

「あ、晃ちゃん」

「んー……蒼恋、可愛い」

自分を包んでいた晃弘の腕に、ぎゅっと抱きしめられた。再び蒼恋の心臓が大きく跳ね上がる。期待して顔を上げると、晃弘は目をつぶって本格的に寝息を立て始めていた。

「晃ちゃん？　ねえ、晃ちゃんってば」

「……」

ゆさゆさと揺らしても晃弘はびくともしない。気持ちよさそうに眠っている。

「あ、晃ちゃんの、バカァ！」

蒼恋は晃弘の胸にげんこつを当てた。

花嫁よりも先に眠ってしまうとはどういうことだ。呆れと情けなさで悲しみで、目に涙があふれる。

——初めての夜がこんなだなんて。

あんなに緊張していたのが馬鹿みたいだ。この夜のために準備したとおきの下着がかわいそうすぎる。

蒼恋は、ぼろぼろ零れた涙を晃弘のワイシャツに押しつけた。

晃弘は新婚旅行中もきつと、こんなふうに蒼恋を子ども扱いして、どこまでも保護者感覚でいるに違いない。もしかしたら蒼恋がもつと大人になるまで手を出してはくれないのかもしれない。

蒼恋は晃弘にしがみつき、泣きながら眠りについていた。

「……蒼恋、蒼恋」

「んー……」

「そろそろ起きよう、蒼恋。飛行機に間に合わなくなる」

蒼恋はまぶしい朝の光と大好きな人の声に包まれた。

「おはよう、蒼恋」

「あ、きちゃん……？」

目をこすってゆつくりとまぶたを上げる。

知らない天井、知らない枕の匂い。真っ白い布団カバー。ここはどこだろう？

そこまで考えて目が覚める。

ここは蒼恋と晃弘が結婚生活を始めるための新居だ。

「晃ちゃん……起きてたの？」

「ああ。俺、とんでもない格好で寝てたからな。シャワーも浴びてきた。まだ眠いか？」

「……ううん」

昨夜、蒼恋は泣きながら眠ってしまったようだ。きつと目が腫れ、顔全体がむくんだ可愛くない顔をしているだろう。そう思うと体を起こす気にならない。

見ると、晃弘は長袖のTシャツにパジャマのズボン<sup>は</sup>を穿いていた。

その表情はすがすがしい。

「蒼恋の旅行用の荷物はまとめてあるんだよな？ 顔洗っておいで」

晃弘は当然のように笑顔でそう言った。蒼恋の気持ちになどまるで気づいていない。

朝になってしまった。ふたりの間に何ごともないまま……朝に。

むなしさがこみ上げる。

「私……いけない。旅行、しない」

「どうした？ 具合でも悪いのか？」

晃弘が蒼恋の額に手をのせる。その手を払いのけ、布団に潜った。

「なんでいけないのかわからない晃ちゃんなんか、嫌い！ 大っ嫌い！」

「えっ」

「どうして保護者の顔をするの！ いつまでも私のこと、子ども扱いしないでっ！」

心臓がドクドク鳴って、頭のとっぺんから爪先まで血が駆け巡っている。お腹の奥底に溜まっていたものが一気に口から零れた。

彼を困らせたいわけではないのに気持ちを抑えられない。悔しくて、でもそれをどう伝えていいのかわからなかった。子ども扱いをやめてと言いながら子どもじみた行動を取っている。

そんな自分に嫌悪した蒼恋は、目を固く閉じて体を丸めた。晃弘はきつと呆れているに違いない。(でもこのままじゃ、晃ちゃんの奥さんなんて言えないもの……！)

「……わかった」

晃弘がつぶやく。何がわかったというのか。蒼恋は返事もせず、じつと固まっていた。

「本当にいいんだな？ 蒼恋」

「あ！」

かけ布団をがばつと剥がされる。

「蒼恋」

丸くなっている蒼恋に覆いかぶさった晃弘は、剥がしたばかりのかけ布団をふたりの頭の上にかけた。

薄明るい布団のなかで、晃弘の顔が目の前にある。彼は怒ったような表情でこちらを見ていた。

もしやまさか、今「する」というのだろうか。

「あ、あの、やっぱり」

「子ども扱いするなって言ったのは蒼恋だろ」

両肩を押さえられ、蒼恋の首もとへ知らない感触が伝わった。

「えっ、あ……？」

蒼恋は自分が何をされているのかわからなかった。

洗ったばかりの晃弘の髪の毛の香りに眩暈が起きる。だが、それ以上に、首もとにかかる晃弘の息と、柔らかな感触に意識がいく。

「……蒼恋」

「あ」

晃弘の唇が押しつけられるたびに背中がぞくぞくと粟立つ。いやなのではない、甘く痺れる感じだ。

「ダメ、……あ」

自分の意志とは関係なく、勝手に声が漏れてしまう。

「一緒に旅行へいくって言わないとやめないよ」

晃弘が蒼恋の足の間に自分の体を押し入れてきた。パジャマのズボンを穿いているとはいえ、足が大きくひらいてしまつて恥ずかしい。閉じようとすると、今度は耳に刺激を受ける。

「あ、晃ちゃん……や、んっ」

ちゅっという音が間近です。耳にキスされているのだ。

「俺は蒼恋と一緒に旅行がしたいんだ。蒼恋と一緒に見たいものがたくさんあるし、あつちで渡したいものも、伝えたいこといっぱいある」

晃弘の声と吐息にクラクラして、冷静に彼の言葉を理解できない。

「……伝え、たいこと？」

「今まで言わなかったことを、たくさん言いたいし、したい」

「し、したいって、あ！ ひゃっ」

首筋から下、多分鎖骨のあたりだろう。そこに彼のキスが移動した。蒼恋の体がびくんと揺れる。これ以上されたらどうなるかわからない……！

「い、いきますっ！ 晃ちゃんと一緒にいくから！ 飛行機の時間に合わなくなっちゃう！」

焦った蒼恋は声を上げた。晃弘はそこでようやく体を離し、ベッドを下りた。そして床に膝をつき、頭を下げる。

「晃ちゃん？」

「蒼恋。昨夜、先に寝たことは謝る。本当にごめん」

「……うん」

「最初に言っておけばよかったな」

「何を？」

「酒臭いオッサンに迫られるのなんかいやだろうと思って、結婚式の日は何もしないって決めてたんだ」

「え？」

「いや、あそこまで飲まされなかったら、わからなかったけど……でもせっかくなら新婚旅行先で、ちゃんとしたほうがいいだろうと思って」

ベッドに横たわる蒼恋の顔を、叱られた子どものような上目遣いで晃弘が見ている。

「晃ちゃんはオッサンなんかじゃないよ」

蒼恋は苦笑した。

「蒼恋の年頃から見たら十分オッサンだって」

「晃ちゃん」

「ん？」

「向こうでしたいことって……何？」

「……今の続きだよ」

「本当に？ 晃ちゃん自分のこと、私の保護者だと思ってる……？」

「思ってたら結婚なんてするわけないだろ。蒼恋こそ、俺のこと保護者だなんて思ってるやないよな？」  
差し出された晃弘の手に両頬を包まれた。射抜くような彼の瞳に囚<sup>とら</sup>われる。

「思ってる、ないよ」

「今度は拒まれてもやめられない。いいんだよな？」

それは、見守るだけの優しい視線ではなかった。蒼恋の知らない、蒼恋を求める男の……瞳の色だ。自分もこんな瞳で晃弘を見つめているのだろうか。

「やめないで」

心からの気持ちを伝える。晃弘に抱かれたい。彼の妻として、心も体も愛されたいと思うから。

「俺と一緒に旅行してくれるか？」

「はい」

「ありがとう、蒼恋」

安心したように息を吐いた晃弘は、蒼恋の背中に手を回し抱き起こすと、そのままお姫様抱っこした。

「きゃー！」

「洗面所に行くか？ リビングか？ どこにいききたい？ 連れていく」

「じ、自分でいけるよ。……重いでしょ？」

「軽くて心配なくらいだ。旅行でたくさん食べろよ？」

「うん。甘いものいっぱい食べちゃう」

晃弘が笑いながら蒼恋の頬にキスをする。蒼恋もお返しに晃弘の頬へキスをした。

すっと胸のつかえと不安がなくなる。

晃弘の考えていたことと、蒼恋が期待していたこと。ズレはあったが、自分の思いをないがしろにされていたわけではない。

「蒼恋、飛行機で眠っておけよ？」

「時差がほとんどないのに？」

「夜のためにだよ。俺、今夜は絶対に寝ないし、蒼恋を寝かせる気もないから」

「晃ちゃん……！」

蒼恋を抱き上げる手は力強い。蒼恋は晃弘の首に両手でぎゅつとしがみついた。

約束ね、と、彼の耳に囁<sup>ささや</sup>きながら。

ふと目が覚めて前を見る。あと三十分でバリのデンパサール空港に到着するとモニターに表示されていた。

機内食を食べたあと本格的に眠ってしまったらしい。披露宴の疲れが残っていたのだろう。

飛行機から見る窓の外は白い雲がぼんぼんと浮かび、眼下にはエメラルドグリーンが混じる青い